



今からでも特定秘密保護法に反対を

柴田 鉄治

特定秘密保護法があれよあれよと言う間に衆参両院で強行採決され、成立してしまった。自民・公明の与党を中心に一部の野党と修正を協議したという形をとりながら、「国民の反対運動が盛り上がらないうちに」と大急ぎで成立させてしまったような感じである。

確かにメディアの立ち上がりは遅く、国民がその危険性に気づいて「反対!」の声をあげたのが間一髪間に合わなかったという状況はある。しかし、その責任をメディアの感度の鈍さに押し付けるわけにはいかない。私たち日本科学技術ジャーナリスト会議 (JASTJ) も、一連の動きをただ見守ってしまい、反対の声をあげる機会を逸してしまったからだ。

振り返ってみれば、声をあげる機会はいくらでもあった。ノーベル賞の受賞者、白川英樹博士や益川敏英博士ら2000人を超える科学者たちが参加した「学者の会」が反対声明を出したとき、この法律は科学技術の発展を阻害する恐れがあることに気づくべきだった。

歴史的に見ても、科学技術は情報を公開し、世界中で情報を共有化することによって進展してきたことを考えれば、そのことはすぐ理解できたはずである。いや、それよりもっと早く、この法律がまとまってすぐ求められたパブリック・コメントでも、8割近くの人が反対だったときに気づいてもよかつたはずなのだ。

また具体的な問題でも、私たちは福島原発事故に直面して、「まるで大本営発表ではないか」という厳しい批判の声がメディアにぶつけられたことを知り、

正確な情報を伝えられなかったことがどれほど被災者たちを苦しめたか、を実感したばかりである。

特定秘密保護法では、テロ対策が重要な目的として示されており、原発関係の情報も秘匿される恐れは極めて大きいのだ。現に、同法の衆院通過の前日に開かれた福島市での公聴会でも、全員が反対意見を述べたことでもそれは明らかだろう。現状でも情報が秘匿されたのだから、同法が施行されたらどれほど隠されてしまうか、想像がつく。

ジャーナリズムにとってのマイナスは、いうまでもない。同法は秘密を漏らした公務員を罰する法律だとは言っても、情報を聞き出そうとしたメディアの記者が「教唆・煽動した」として罰せられることになっており、その威嚇効果は計り知れない。国民の「知る権利」がどれほど阻害されるか、明白だろう。

先進国では秘密とされた情報でも大体30年後には公開されるという決まりがあるのに、日本にはその規定さえなく、今回の特定秘密保護法では60年、場合によってはそれ以上の秘匿まで可能だということだから驚く。これでは「歴史の検証」さえできなくなってしまう。

JASTJでは、反対声明を出すタイミングを失したとして、「同法に対する勉強会」を企画し、その第1回として弁護士の山中眞人氏を招いて話してもらった。近く第2回を開く。

JASTJとしては対応が遅れてしまったが、この会報では私の個人的な意見として、これまでの経過と反対の意見を述べた。(JASTJ理事)

CONTENTS

| | |
|---|---|
| 巻頭言 | 1 |
| ニュース | 2 |
| JASTJ20周年記念出版/小出五郎元会長が逝去 月例会ユーチューブで配信/スクープ東京会合報告会 新年会開催 | |
| 例会報告 (12月) 災害と公衆衛生 | 4 |
| 例会報告 (2月) 秘密保護法とは何か | 5 |

| | |
|--------------------------|----|
| 会員だより 「科学ジャーナリズムの未来」 シンポ | 6 |
| 会員だより 環境カウンセラーの試み | 7 |
| 科学ジャーナリスト塾に参加して | 8 |
| 追悼記 小出五郎元会長 | 9 |
| 賛助会員のコーナー | 10 |
| WEB編集長から | 10 |
| 事務局だより | 12 |

JASTJ20周年記念事業で書籍出版 「科学を伝える現場」を伝える

7月に創立20周年を迎えるJASTJは、「科学を伝える現場を伝えたい」をテーマにした書籍を記念出版する。出版担当理事を中心に編集委員会を設け、これまでに執筆予定者と目次の概要を固めた。科学ジャーナリストが現場でどんな工夫をしているのか、体験した苦労や失敗を伝えることで、できるだけ多くの人々に読まれる書籍にする。

目次の検討にあたっては、会員にもどんな話題に関心があるかを聞くなど協力を求めた。その結果、①科学ジャーナリストらがこれまでの経験を振り返り、その経験から得た教訓や反省を伝える「過去の事例から学ぶ」、②今後ますます重要になる科学ジャーナリズムを社会にどう生かすかを考える「今、そしてこれから」、③科学ジャーナリストや科学コミュニケーションの日々の活動に役立つ情報をまとめた「資料編」——の3部構成にすることを決めた。

「過去の事例から学ぶ」では、第12期科学ジャーナリスト塾の講師を中心とした執筆者に依頼することにした。今回の塾は、「科学報道の失敗体験に学ぶ」をテーマとし、講師本人の体験談や対象となった事例の意味合い、失敗を糧とするための方策を柱に講

義が進められた。これらを各講師が原稿にまとめて、過去の事例から何を学ぶべきかを伝える。長崎豪雨災害や水俣病の報道の体験談は、その時代を知らない若い人々への重要なメッセージとなる。

「今、そしてこれから」では、リスクコミュニケーションや臓器移植など、現代社会の課題と向き合うために必要な考え方や新しい問題について理解を深め、私たちが何を学ばなければならないかを考えるための話題を提供する。また、著作権問題や地震予知などは、以前から大きな課題だったが、東日本大震災などを経て改めて新たな問題として再認識されている。科学ジャーナリズムのあるべき姿を具体的に描くための話題を提供する。

「資料編」では、JASTJ会員に「20年後の世界がどうなっているか」を予測してもらうアンケートを実施し、その結果を掲載する。20年前に実施した同様のアンケートの結果もあわせて掲載、私たち人類の未来を予想する力の可能性と限界を確認しながら、これからの科学と科学コミュニケーションのあり方を考える材料にしてもらう狙いだ。

(JASTJ理事 藤田貢崇)

JASTJ元会長 小出五郎さん急逝 「語る会」開催

JASTJ元会長の小出五郎さんが1月18日、心不全のため亡くなった。現役時代はNHK科学番組部を代表するディレクターとして硬派テーマを数多く手掛け、解説委員になったのちJASTJに参加。2005年から4年間の会長時代は科学ジャーナリスト塾の立ち上げなどに力を尽くした。3月22日にはJASTJなどを中心に親交のあった人たちが東京・内幸町の日本プレスセンターで「小出五郎さんを語る会」を開き、その人柄をしのいだ。【追悼記は9ページに掲載】

訃報が届いたのは18日の未明。その時の「いったいなぜ!？」という驚き。そして徐々に体の芯から力が抜けていく脱力感を今もはっきり覚えている。「心不全」との診断だったが、いまだに出来事そのものが信じられない。葬儀は、小出さんのかねてからの希望で密葬となり、余計に小出さんがある種のぬくもりを残したまま、突然私たちの前から姿を消した印象が強く残る。

小出さんは、科学番組作りの優秀なディレクターだった。「原発問題」「核問題」「人体シリーズ」など手掛ける番組は硬派で巨大なテーマが多く、国際賞も受賞する

いわゆるスターディレクターだった。

一方、お話をするとユーモアがあり、優しくな目でイギリス仕込みのしゃれたジョークを披露する面もあった。NHKでは所属する科学番組部だけでなく、広く局内の若手ディレクターたちの信望が厚かった。社会情報番組、報道などにまで、小出さんを慕う後輩たちは広がっていた。解説委員になったのち、クローズアップ現代にも頻りに登場。出演数は、おそらく史上最多だった。

「小出五郎さんを語る会」は、小出さんと親交があった人たちの間から期せずして声が上がって企画された。22日の会には夫人の由紀子さんら家族も参加、小出さんの出演番組を会場で見ながら、思い出や私たちに残された業績について語り合った。

会を企画した一人として、この会が小出さんの精神を共有し、大きく育てていききっかけになれば、これほどうれしいことはない。(JASTJ理事 室山哲也)



小出五郎さん(撮影 高木朝生)

月例会をYouTubeで配信

多彩な講師を招く月例会のビデオ映像をYouTubeで配信するサービスを開始した。昨年12月の月例会を皮切りに例会の様様をビデオ撮影し、会場に来られない遠隔地の会員や当日参加できなかった会員も視聴できるようにした。

YouTubeによる配信は、一般公開ではなく会員限定の公開で、配信された動画を見るにはURLが必要。視聴を希望する会員はJASTJ事務局(hello@jastj.jp)にメールで問い合わせれば、返信メールでURLを取得できる。またはJASTJのホームページから会員サイトにパスワードで入れば限定公開用のURLにリンクできるよう配慮した。ぜひこちらも利用していただきたい。なお、配信開始日は

メールで会員に連絡するが、HP上での告知も予定している。

配信にあたっては、①ゲスト講師の許可がなければ配信はしない、②映像は講師の音声とスライドが中心、③講演後の質疑応答の場面は配信しない、④配信期間は2週間に限定し配信期間終了後には映像を削除する、⑤録画は禁止、⑥会員以外にURLを公開（フェイスブックやブログ等で）しない——ことを条件とした。

昨年12月に初めて配信したときには、会員から感謝の言葉も寄せられた。今後もこのサービスが長く維持できるよう、会員の協力をお願いしたい。

(JASTJ理事 西野博喜)

今秋第2回スコープアジア東京会合開催へ

昨年11月に開いたスコープ(SjCOOP)アジア東京会合の報告会が1月27日、月例会として開かれた。高橋真理子JASTJ副会長が1992年の第1回科学ジャーナリスト世界会議(東京開催)にさかのぼって東京会合開催までの経緯を報告、今秋予定される第2回会合への協力を呼びかけた。

高橋さんによると、発端は第1回科学ジャーナリスト世界会議をきっかけに設立された世界科学ジャーナリスト連盟(WFSJ)にある。WFSJは憲章採択、第1回総会開催を経てアフリカ・中東での科学ジャーナリスト養成プログラム「SjCOOP」を実施、その成果を受けてアジア地域でのプログラム実施を日本に打診してきた。

「最初は無理だと思ったが、2012年の夏にWFSJ

事務局が予算を獲得したとの連絡が入り、協力しようと腹をくくった。まず日本側でも資金調達をしなければいけない。取材の経験を生かして情報を集め、何とか笹川平和財団からの支援を得ることに成功した」と高橋さんは振り返った。

昨年の東京会合では、科学ジャーナリストを養成するメンター役の記者がアジアから集まった。今年9月の第2回東京会合ではメンターに加え、メンティー役としてトレーニングを受ける若手記者もアジアから来日する。来年には韓国で第9回科学ジャーナリスト世界会議を予定しており、その下地作りをする上でも、9月の東京会合は貴重な機会となる。そのため、ホスト役の日本側からの多数の協力や参加を期待したい。

(JASTJ理事 館野佐保)

新年会も開催

東京会合の報告会終了後、JASTJの新年会が開かれた。東京会合で通訳や司会として協力してくれた学生会員の下山龍之介さんや鈴木美慧さんも参加、「経緯を聞いて、こんなに意義深い催しに貢献が出来たことがわかり嬉しい」と述べた。JASTJ事務局の保科尚子さんは「会場に準備したお茶やお菓子が好評で、『ホスピタリティに感謝』と言われたのが忘れられない」と、東京会合を振り返った。白山の会場には約30人が集まり、ワインや料理を囲んで交流を深めた。

(JASTJ理事 館野佐保)



ワインと軽食を楽しみながらの新年会

(撮影 高木鞆生)

公衆衛生から見た震災復興 越智小枝・相馬中央病院内科診療科長

東日本大震災から3年、インフラが回復する一方で、被災地の実態は見えにくい。12月6日の例会では、福島県相馬市で地域医療に取り組む越智小枝・相馬中央病院内科診療科長が、公衆衛生の視点から災害からの復興について語った。

災害時に鮮明化する社会課題

越智医師は、2011年の東日本大震災の半年後に英国インペリアルカレッジ・ロンドンの公衆衛生大学院に留学。帰国後、相馬市に移住し、2013年11月から相馬中央病院内科の常勤医として仮設住宅検診や外来患者の診察など、地域に密着した医療に従事している。

講演では、まず世界保健機関(WHO)による公衆衛生の定義を紹介し、地域社会の視点から健康維持を担うことの重要性を訴えた。平時の先進国、それも都市生活者は忘れがちだが、健康は元来、個人の努力よりも環境によって作られる。そのため、公衆衛生の関心はその社会環境や文化の在りように向かし、公衆衛生が示す諸指標を見ることで、その地域の真の姿が透けてみえると指摘した。

それは特に、災害時に分かりやすい形で社会課題を反映して表われるという。たとえば2013年の調査によると、仮設住宅に住む高齢者の60%が「廃用症候群」だった。廃用症候群は、過度な安静や活動性の低下によって筋力低下、心肺機能低下、うつ状態などが体に生じた状態をさす。

越智医師は、その背景として「仕事も家もないのに外出したくない」「運動の音は近所迷惑になる」「酒を飲んでいたい」「外に出て自分が住んでいる仮設

住宅を見たくない」「被ばくがこわい」などの心理的理由をあげた。

この状況を改善するには「自分で健康を維持しようという意識がないこと」の理由を考えるべきだと越智医師は指摘する。健康には個人の意識が大きく関係するため教育が重要だが、単に健康知識を冊子などで配布するだけでは効果は見込めない。「地域の文化や常識を知り、社会の発展を目指して地域社会が努力する」ことが必要だとして、医師だけでなく、ジャーナリストも含めたすべての職種の人が「健康」をゴールに見据えて地域復興に関わるべきだと訴えた。

ふだんの外来患者の診察でも、地域の課題が垣間見えるという。腰が曲がっている人が多いが「骨粗鬆症」という言葉も知らない。「寝たきり」は病気ではないと思って家で見てしまうという、医師不足地域ならではの「常識」も存在する。医師不足の解消と教育が急務だとして、越智医師は「災害によってヒト・モノ・カネが集まっている今こそ社会をより良くするチャンスであり、教育の機会」と強調した。

メディアの役割も議論に

後半ではメディアの役割についても質疑応答があった。印象的だったのは、1月18日に急逝したJASTJ元会長の小出五郎氏が質問の中で触れた「原発作業員の健康管理」の問題。越智医師によると、ある原発作業員が肺炎で入院したが、医療保険を持っていなかった。作業員は健康保健が任意加入の非正規雇用で、その契約には暴力団関係者の関与も噂されていた。現場の医療従事者の間では「原発の人は保険を持ってない」というのが常識だという。

震災から3年が経過し、被災地はますます一括りにできない状況になっている。小出氏は「クラブで発表を聞いているだけでなく、現場で声を拾わないといけない」と述べた。



健康をゴールに見据えた地域復興を、と訴える越智医師
(撮影 高木勲生)



質疑応答でのメディアの役割についての議論が印象的だった
(撮影 高木勲生)

(JASTJ理事 瀧澤美奈子)

秘密保護法とは何か～その課題と今後～

—山中真人弁護士に聞く

2月21日の例会は、延期となった中村登美子弁護士にかわって、中村さんの司法修習同期である山中真人弁護士を招き、秘密保護法の基本とこれからの課題をテーマに話を聞いた。山中さんは企業法務を中心に仕事をしているが、日本弁護士連合会の憲法問題検討委員会の委員としても活動している。今回は秘密保護法の話から日本の民主主義の問題点にまで話題は広がった。

際限ない拡大解釈の危険も

講演は、まず自民党憲法改正草案の条文を引用して、集団的自衛権の解釈の改変と同様に秘密保護法も安倍政権の憲法改正の先取りの一環であるとの話から始まった。「憲法は変わっていないのに法律が出来ている」と述べ、三権分立が崩れる危険性を指摘した。秘密を「行政が指定して管理する」ため、行政が一番上になり国会にも裁判所にも情報が出て来ないことにもなり兼ねないという。また、秘密の範囲に違法・不正行為を除くという限定がないことや、期間の指定は特例をつかえば無限に指定できることから、役人の保身になる危険性も指摘した。

参加者の多くは、この法律で国民の知る権利を守るためのジャーナリストの取材活動に影響がでるのではないかと心配している。特定秘密の対象は、「防衛」「外交」「特定有害活動（スパイ行為等）の防止」及び「テロリズムの防止」の4分野である。たとえば自民党は原発の情報は該当しないとしているが、警備を理由にすれば「テロリズムの防止」に、将来的に核兵器を持つためとすれば「防衛」と読める。



三権分立の危機を指摘する山中真人弁護士
(撮影 西野博喜)

実際はどうとでもとれる危険性があると、山中さんは話した。

取材する側として気になるのは罰則である。罰則の対象は、過失を含めた漏えい、教唆、煽動が対象となっている。「著しく不当な方法」でなければ罰則の対象

にならないとしているが、これらの内容は時の権力の解釈で変わる。「内容が曖昧で、罰則が厳しい」と述べ、米国での「ジャーナ



秘密保護法の問題点について意見を交わす参加者
(撮影 西野博喜)

リストが熱心に調べ、これは秘密じゃないだろうとして教えて、求めた側は教唆であり、出した方は過失漏洩で両方処罰される」との例を出し、取材で役人がしゃべらなくなる可能性を指摘した。

誰が必要としているのか

手続き上の問題点にも触れた。パブリックコメントの期間は2週間しかなく、そのコメントのほとんどは反対だった。「この法律は国会と国民の意見の食い違いを如実に示している」と述べ、「今の日本の政治体制は適法に少数派の意見を抹殺できる」と指摘。「民主主義は最悪の制度だという言葉の意味を痛切に感じる」と締めくくった。チャーチルが述べたこの言葉には「民主主義以外のあらゆる政治形態を除けば」という前提が付いているが、今回の国会審議ではそうした前提なしに悪い面だけが浮かび上がったといえる。

質疑応答では、行政に管理される法律をなぜ政治家がつくるのか、野党が反対しないのはおかしいという疑問や、劣化した行政官が管理することへの不満、公安の復権、第三者機関が必要、日弁連の戦略も必要ではないのかなど、さまざまな意見がかわされた。

なぜいま強行採決をしなければならなかったのかに対する明瞭な理由はなく、さまざまな政治的利害関係から成立した法案のようである。日本が持つべき法律かという徹底した議論が必要であると感じた。この問題は、ジャーナリストだけではなく、自然科学者の間にも研究に影響があるのではないかと懸念する声があったことも付け加えておきたい。

(科学ジャーナリスト塾 塾生 都丸亜希子)

シカゴで「科学ジャーナリズムの未来」シンポジウム

世界科学ジャーナリスト連盟と米国のカブリ財団が主催する「科学ジャーナリズムの未来」シンポジウムが2月17～19日にシカゴで開かれた。招待者のみの催しで、科学ジャーナリズムの「定義」「国際協力」「新しいビジネスモデル」「新しい道具」の4つのテーマについて活発な意見交換がなされた。

世界各地から多様な53人が参加

日本からは私と米国留学中の三井誠・読売新聞科学部記者が参加、2015年に世界会議を開く韓国からは5人がやってきた。スコープアジアのメンティであるインドネシアのユナント・ウトモ氏も含め、アジアから8人が招かれたことになる。

アフリカからはネイチャー中東版の編集長モハメド・ヨヒア氏とウガンダとケニアの女性記者、中東からアルジャジーラ医療編集長が招待された。そのほか、ネイチャー編集長、ウォールストリートジャーナルやフィナンシャルタイムズ、英BBC、独フランクフルターアルゲマイネ紙の科学部長やベテラン科学記者、国際調査報道ジャーナリスト連合(ICIJ)のマー・カブラさん、環境報道サイトを立ち上げて注目されているデービッド・サスン氏、さらには大学の研究者ら合計46人が、そして政府系や民間の財団のコミュニケーション担当者ら7人がオブザーバーとして参加した。世界連盟の元事務局長でスコーププロジェクトを立ち上げたジャンマーク・フルリー氏や新事務局長のダミアン・シャロー氏ももちろん参加した。

会場はシカゴ郊外のハイヤット・ロッジホテル。月曜の夕食からプログラムはスタートし、サイエンティフィックアメリカン編集長のマリエット・ディクリスティーナさんの司会で全員が自己紹介をしつつ、科学ジャーナリズムで「一番問題とされていること」と「一番すごいアイデア」を披露。翌日は朝



「科学ジャーナリズムの国際協力」分科会の様子 (撮影 高橋真理子)



参加者が集まって記念撮影 (提供 カブリ財団)

から全体会議、夕方から3日目午前中が分科会での議論に当てられた。そして、3日目午後がまとめの全体会、という流れだ。

アイデアを一つずつ詰めていく

参加者には事前に「シンポジウム入門」と題されたペーパーが配られた。目標は「科学ジャーナリズムにとって重要な課題の選択を進める」とことと明記され、それぞれの分科会ごとに目標と参考文献(WEBですぐ読めるもの)が挙げられていた。

私は「国際協力」の分科会に参加した。2日目の午後のフリー討論で挙げられた国際プロジェクトについて3日目の午前中に「目指すもの」「いつ」「どうやって」「評価基準」「資金提供者」を一つひとつ詰めていく。思いも寄らないアイデアが出てきたわけではないが、議論の中から合意を積み上げていく手法には学ぶところが多かった。

ビジネスモデルや新しい道具の分科会では、「私がいも寄らないこと」もたくさん出たのではないかと思う。だが、帰国便の関係で午後早くに帰らざるを得ず、最後のまとめを聞けなかったのは残念だった。もっと残念なのは、早く帰ったせいで記念写真に入れなかったことだ。

(JASTJ副会長 高橋真理子)



3日目に開かれた全体会議 (撮影 高橋真理子)

環境カウンセラーの試み

環境カウンセラーと名乗ると、眉をひそめられたり、警戒されたり——。無理もない。環境〇〇という資格はうんざりするほど存在し、胡散臭いものも多い。環境団体は、反対ばかりを唱え、時には過激な行動に移る。あら探しに来たのではと勘ぐられる。

私は、環境省認定の環境カウンセラー。所属はない。自然の中で遊び暮らした野生児が「環境」を意識したのは1980年代。地元のウミガメ保護に端を発した環境への関わりは、次第に環境教育への取り組みとなった。

子どもや市民の“学びの場”作り

単発の出前授業や講演会講師が多い中、8年間も関わることができているのが「環境未来探検隊」だ。環境万博と言われた愛地球博を受け、環境保全に取り組むリーダーの育成を目指して、2006年に名古屋市教育委員会が組織した。

初年度の隊員は小学5年から中学までの36人。夏休み頃の座学に始まり、日帰り研修を4回ほど。3泊4日の研修の後、月2回ほどの準備会を経て冬休みの子供会議に至る。私は座学講師、研修先の選定・調整・引率、準備会・会議当日の指導に当たる。うれしいのは、修了生も後輩の子どもたちの引率や、こども会議の司会・運営などに関わることだ。年により大きく形を変えながら今も続いている。

名古屋市環境局が主体になって2005年に始まった「なごや環境大学共育講座」にも、私は社会見学型講座「環境カウンセラーと行く」を企画している。NPOや企業、市民がそれぞれ独自の企画を持ち寄る「学びの場」作りの活動に個人として参加しているのだ。

その一つが「セントレアまるごとウォッチング」。2008年からほぼ毎年開催している。一般から20人弱を募集、中部国際空港の関連施設を6日間かけて見学する。税関・入国管理局・検疫関連施設のほか、



中部国際空港で見学したバードストライク防止のための空砲発射の実演 (提供 岡本明子)

島と飛行機の安全を守る海上保安庁や警察、航空気象台などが対象だ。空港会社のバスで滑走路に入り、バードストライク予防のパトロールに同行。その時に見た空砲発射の実演は圧巻だった。

知名度は低くとも、重要な役割を担う施設の一つが動物検疫所。犬猫の係留施設だけでなく、鳥インフルエンザ用の中部検査・診断センターも併設されており、稼働中のバイオセーフティレベル3の施設も見学した。

環境と科学への思いを伝えたい

同じ共育講座の一環で2012年に企画したのが「エネルギー資源を考える」。福島で“原発事件”で露わになったエネルギー基盤の脆さを見つめ、今後の選択の一助にしたいとの思いから立ち上げた。

この講座では、6日間にわたる専門家の講義やエネルギー関連施設の見学を用意した。国土交通省、経済産業省、農林水産省、環境省の担当者に加え、メタンハイドレート研究所長にも講義もお願いした。見学先は、水力、原子力、火力など一般的な発電所、メガソーラー、小水力発電など話題の発電システム、核融合研究所や、核廃棄物の地層処分の研究所などの施設も含めた。

広大な面積を必要とする太陽光発電、極めて限られた条件でしか設置できない小水力発電の実態を知り、新エネルギーの多難さを実感した。一方、超深地層研究所で地下300mに潜る体験は貴重だったが、肝心の核廃棄物の地層処分は実験・研究のみで先は見えない。迷走は続く。

私たちの暮らしは、環境とも科学とも無縁ではいられない。様々な関係をあぶりだし、考え、行動する。そんな思いを伝える機会を私は窺っている。

(JASTJ会員 岡本明子)



環境未来体験隊の活動で子どもたちに自然の大切さを伝える (提供 岡本明子)

「科学報道の失敗体験」テーマに講義 塾後にどう生かす？

第12期の科学ジャーナリスト塾は3月17日に半年間の日程を終えた。この間、10人の講師がそれぞれの失敗体験を語った。この塾をどう発展させるか。まずは12期の塾生の声を聞くことから、次のステップにつなげていきたい。

1月16日午後9時10分、塾のメーリングリストに、発信人・小出五郎さんから「塾生のみなさんへ」とのメールが届いた。「科学ジャーナリスト塾2014年の幕開けは、来週1月20日(月)夕方6時からです」と、次の出番の隈本邦彦さんによる「書けなかった阪神・淡路大震災」への出席促しであった。小出さんはこのメールを打った数時間後に自宅で倒れ、この世を去った。

「失敗に学び、失敗を繰り返さず、失敗をステップにジャンプする」。12期の塾開講に当たってこう呼び掛けた小出さん自身は、「核戦争後の地球」の制作番組をめぐる外部からの干渉に放送者はどう抗したか、昨今の動きに即した教訓を話した。柴田鉄治さんは「水俣病も原子力の報道もメディアに同じ失敗があった」と半世紀を振り返った。

このほかに「失敗」の題材は、日英の科学コミュニケーション（小出重幸）、システム開発（山本威一郎）、著作権（大江秀房）、人口問題・東大医学部紛争（牧野賢治）、地震予知（横山裕道）、核燃料サイクル（林勝彦）、豪雨災害（佐藤年緒）にも及んだ。

塾生11人の全員出席は難しいようで、大雪直後の2月17日は出席者2人。それでも牧野講師とはテーブルで囲んでの和やかな雰囲気だった。3月3日、横山講師は著書『いま地震予知を問う』を出席者にプレゼントし、活発な意見交換になった。今後、この塾での話は印刷物として公表しようとする動きがあり、塾生の受け止め方も伝えたい。

12期の運営については、午後6時の開始時刻、会場への距離、質疑の時間、塾生のニーズ把握は適切だったか、塾生同士の意見交換・交流はどうだったか、そ



3月3日の塾で横山講師の話聞く塾生たち

(撮影 佐藤年緒)

れらを検証する必要がある。かつ塾の最初の精神に立ち返って、次につなげたいと考える。最後に前号で掲載できなかった塾生の抱負や感想を紹介する。

(JASTJ理事 佐藤年緒)

分かりやすく伝える技術を

柏野 裕美さん

理系ではないなりに努力したいと思います。難しいことをわかりやすく伝える技術を学ばせていただきたいです。

(コンサルタント、ライター)

科学ジャーナリズムに興味

田中 紳顕さん

昨年ワシントンDCに留学をし、ジャーナリズムを勉強しました。その際、現地メディアの科学記事や検証記事への意識の高さを感じ、科学ジャーナリズムに興味を持ちました。塾で各界のプロによる授業は、学生の私に難しいながらも大変新鮮でした。受講生も深い知識を持ち、質疑応答の鋭い質問に感心します。塾で学んだ事柄を将来何らかの形で社会に還元したいと考えており、卒業後は記者になるのが希望です。

(慶応大法学部政治学科3年)

脳科学を一般に広めたい

早野 富美さん

大学では精神疾患を対象に、頭部MRIを用いて脳内の体積変化領域を解析し、疾患特異的な脳の構造変化を調べるなど病態解明の研究をしています。将来は脳科学全般を一般にわかりやすく広めることを自身のテーマとし、ライターとしても活動していく予定です。塾では、科学に様々な形で携わっている方々との交流や内容の濃い議論を楽しんでいます。

(横浜市立大学医学部精神医学教室)

「伝える仕事」を学びに

船津 雅志さん

内閣府総合科学技術会議事務局で国プロジェクトの評価業務に携わり、プレスリリースやHPでの情報公開を担当し、会議資料などをそのまま公開しても何が伝わるのかと素朴な疑問にぶつかりました。多額の税金を研究に使う意義を担当省庁はどう伝えようとしているのか、「伝え手」側と「聞き手」側の意識・温度の違いを実感しました。私の仕事も「伝える仕事」になり、少しでも参考にしたいと塾に参加しました。

(工業所有権協力センター主席部員)

■ JASTJの「育ての親」

私たち日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）は来年、創立20周年を迎えます。まだまだ小さな存在ですが、それでも日本の社会の中できらりと光るもののある組織に育ってきました。その「JASTJの育ての親」ともいべき人が小出五郎さんでした。

JASTJの存在が多少でも社会にインパクトを与えたものを3つあげよといわれれば、「科学ジャーナリスト塾」「科学ジャーナリスト賞」「福島原発事故の検証作業」をあげることに異議を唱える人はいないでしょう。その3つの事業をすべて育てた人なのです。

科学ジャーナリスト塾は「応募者が5人でもやろう」と言い出した提案者の一人で、自ら塾長を務め、奥様に事務係を手伝ってもらおうというまるで寺子屋のような形でスタートでした。でも、塾生にノーベル賞の白川英樹博士まで応募してくる盛況で、いまや12期生まできています。

科学ジャーナリスト賞では創設のときから選考委員を務め、優れた映像作品の選別に独特の見方を示し、次々と「大賞」を世に送り出しました。また、原発事故をめぐる「4つの事故調」の報告書を科学ジャーナリストの目で分析した出版物を2冊も出版するという大役の中心的な役割を果たされました。

私たちは、小出五郎さんの育て上げたJASTJを、さらに一層発展させるよう努力することをご霊前に誓います。

（JASTJ理事 柴田鉄治）



第12期科学ジャーナリスト塾で科学報道の失敗体験について話す小出さん（撮影 西野博喜）

■ 巨星逝く

科学ジャーナリストの小出五郎さんは“志”の人であった。「核汚染のない豊かな環境と平和な国」を望み、ブログ「5656報告」等でも発言を続けてこられた。小出さんは敗戦で飢えを体験し、平和憲法を学んだ世代である。NHKを目指す原点は中学時代の第五福竜丸事件にあった。小出さんから戴いた「沈黙のジャーナリストに告ぐ」「戦争する国、平和する国」に記されている。

東大で放射線生態学を学びNHKに入局。原発批判番組のパイオニアであった。また、解説委員として「クローズアップ現代」の最多出演者であるが、ディレクターとしての代表作はNHK特集「核戦争後の地球」である。もし1メガトンの核が使用されたら日本と地球はどうか。世界の科学者126人に取材し理論面を担当、映像面の相田洋さんと共同制作でイタリア賞など多数受賞し名作となった。

しかし、右寄りの政治家と学者から公開質問状が届き

国会でも問題になる。地雷を踏んだ番組からは人々は去ってゆく。小出さんは一人で返事を書いた。担当部局のデスクだった私は小出さんの傍で深夜までお手伝いをしたが、抗議には科学番組でと小出キャスターと共にETV特集「核の冬」を制作した。

特筆すべき点は、小出さんが内外の圧力に終始毅然としていたことと、部長と会長は政治家発言に揺れる理事らを抑え現場を守ったことである。今、舛井勝人会長と経営委員らの言動がジャーナリズムとの関連で問われている。それだけにこの歴史的事件の顛末は示唆に富む。その後お世話になった番組「人体」や映画「いのち」の中にも先輩の“志”は生きている。

安らかにお休み下さい。（JASTJ理事 林勝彦）

■ ころざしある若者を育んだ塾長

小出五郎さんは2005年5月から2009年5月まで2期4年間、会長を務めた。会員の自発性を生かそうと、いくつかのプロジェクトを立ち上げた。事務局を外部に委託するなど、小出さんの幅広いつながりに頼るところが大きかった。

JASTJの活性化につながる大きな動きをつくったのも小出さんだ。2002年の夏、理事会で「ころざしのある科学記者を育てよう」と塾の立ち上げを提案した。理事全員の賛同を得られなかったが、「会の財政に迷惑をかけないから」と固い決意で呼びかけ、奥様が会計係を担うなどボランティア精神でのスタートだった。

「佐藤さん。手伝ってもらえないかな」。理事会で小出さんに優しい声を掛けられ、一瞬躊躇したが、立ち上げ

に加わった。私自身、日々の仕事で科学を扱うことの難しさを感じており、他社のベテラン記者から学ぶよき機会だとも思ったからだ。塾では若年から中高年層までが集い、科学を伝えることはメディアだけでなく民間、大学、公務員など、多くの人の関心事であることが分かり、さまざま出会いが生まれた。私の運命も変え、通信社を早期退職した。

振り返ると、JASTJの広がり原動力になったのは、この塾の精神だったと思う。その後、日本の3大学に科学ジャーナリストらを養成する講座が設けられる引き金にもなった。いま小出さんの遺産として在るのは若い人のネットワークと心意気。2013年度、塾を続けるかどうか関係者の間では揺れていたが、小出さんの「続けよう」との一言が、いま12期の塾生を産んだ。小出さんが掲げた「ころざし」をもう一度、深く学び直したい。

（JASTJ理事 佐藤年緒）

失敗から生まれた健康食品「セサミン」

中高年の方に「サントリー？」と聞くと、酒、とりわけウイスキーの会社との答えが返ってきます。30歳前後までの若い人では「伊右衛門」「なっちゃん」といった清涼飲料水のブランド名がです。しかし20年前から健康食品（いわゆるサプリメント）を販売しています。そのメインブランド「セサミン」の開発秘話を紹介します。

発酵は弊社の中核技術ですが、「この技術を使って新しいものを生み出したい」と研究者達は考えていました。その中に「チョコレートのようにとろける美味しい脂質を創りたい」と思った者がおり、微生物を探索していたところ、美味しい脂質ではなかったのですが、アラキドン酸（ARA）という必須脂肪酸を造るカビを発見しました。ARAはDHAと同様、脳の中の学習・記憶を司る海馬に多く含まれ、脳の働きに重要な役割を担っているといわれています。

有用な脂質を見出したので、その生産性向上のため培地中にARAの前駆物質であるリノール酸を構成脂肪酸とする各種油を基質として添加しました。ところ

が、胡麻油を加えた時だけ全くARAを生産しません。実験は失敗です。その時、「脂質の代謝系を変えたのは何か」と研究者は考えました。それが、胡麻油に含まれる稀少成分で抗酸化作用の強いセサミンでした。

その後の研究で、細胞機能を守る抗酸化作用や細胞機能を整える自律神経調節作用によりアンチエイジング効果が期待できることが分かりました。肝臓の保護効果も実証されつつあります。

最近の研究者の実験を見ていて気になることがあります。器具はほとんど使い捨てで、器具をあまり洗いません。また、それらの器具を当たり前のように（器具と反応するかもしれないとは思わず）使っています。ノーベル賞を受賞した田中耕一さんの例を出すまでもありませんが、失敗や偶然から思いもよらぬ結果がもたらされることがあります。

セサミンも研究者の熱意に失敗と偶然が重なって生まれたもので、今の実験環境なら発見できなかったかもしれません。（サントリーウエルネス株式会社健康科学センター顧問 太田裕見）

WEB編集長から

当初の計画から少々遅れましたが、2月下旬にJASTJのWebページをリニューアルしました。もうご覧になられたでしょうか。以前と比べるとずいぶんシンプルな構成になりました。今回は、新しいWebページの活用についてお知らせします。

■ Webページの構成

JASTJが管理するページには、すべて画面の上部に「トップ」「JASTJについて」「会報」「出版物」「入会案内」「関連リンク」「会員専用」のボタンが並んでいます。JASTJについて会員が必要とする基本的な情報は、これらのボタンのどれかに含まれるようにしました。

トップページのみ、左右2段に分かれています。月例会などのご案内は、トップページ左側に掲載されます。右側には、JASTJが進めている各種プロジェクト「SjCOOP Asia」「科学ジャーナリスト賞」「科学ジャーナリスト塾」「なんでも検証プロジェクト」のページへのリンクバナーを配置しました。「会員がつくるページ」は、以前お知らせしていた、会員が作成しているWebページやブログなどを紹介するページです。現在、高橋真理子理事による朝日新聞「WebRonza+」の記事を集

めたページへのリンクバナーが掲載されています。会員の皆さんご自身が紹介したいページを、このようにバナーを使って紹介します。ご自身で作成したバナーがあれば、お送りください。ない場合、こちらで作成（もちろん無料）することも可能です。詳細は担当までメール（system@jastj.jp）でお問い合わせください。

■ 会員専用ページについて

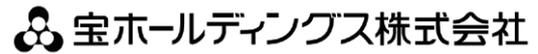
トップページ上部の右端には、「会員専用」のボタンがあり、会員以外は閲覧できないように、パスワードをかけています。最近、JASTJでは会員サービスの一環として、月例会を収録しYouTubeで公開しています（ただし、講師が承認した場合）。この動画は会員のみ閲覧を限定しており、検索できないようになっています。今まで、動画にアクセスするためのアドレスを電子メールでお送りしていましたが、今後はこの「会員専用」のページにリンクを張ることで会員に周知します。

すべての会員に、電子メールでパスワードをお知らせしていますが、もし忘れてしまった場合には担当までメール（system@jastj.jp）でご連絡ください。

（Web編集長 藤田貢崇）

JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

(50音順、2014年3月現在)



宝ホールディングス株式会社



味の素株式会社



株式会社東芝



鷗友学園女子中学高等学校



日本電信電話株式会社



花王株式会社



ノートルダム清心女子大学 情報理学研究所



独立行政法人 科学技術振興機構



株式会社日立製作所



株式会社構造計画研究所



三菱電機株式会社



サントリーホールディングス株式会社



ロート製薬株式会社



一般財団法人 新技術振興渡辺記念会

賛助会員募集中

会員の BOOKS

新刊紹介

いま地震予知を問う 迫る南海トラフ巨大地震

横山裕道著 (化学同人・1800円+税・2014年2月)

東海地震に備えようと予知と防災を結びつけた法律までつくった日本。ところが東海地震ではなく阪神大震災や東日本大震災が発生し、予知は無効だった。いまや「地震予知は一般的に困難」とうたう政府の専門家会議の報告書も出た。それでも東海地震の予知を目指す方針を変えようとする国に多くの地震学者が反発し、混乱が生じている。いったい何が起きているのか。特ダネを含め地震予知の舞台裏に迫り、今後のあるべき姿を描く。

(横山裕道)



東京理科大学 ユニーク人物列伝

山本威一郎著 (東京書籍・1200円+税・2013年12月)

理工系大学の卒業生の多くが、企業のエンジニアや大学の研究者となって社会で活躍していますが、中には非常にユニークな進路をたどった人たちも少なくありません。総合理工系大学である東京理科大学の卒業生の中から、「非理工系への転身」「業界初、世界初への挑戦」「究極の趣味へのこだわり」など波乱万丈な人生を送っている20名の人物をノンフィクション風に紹介します。

(山本威一郎)



『電子情報通信と産業』

西村吉雄著 (コロナ社・4700円+税・2014年3月)

19世紀の電信から、21世紀のインターネットに至るまでの電子情報通信分野の総合的産業史、これが本書の内容である。半導体集積回路とプログラム内蔵方式コンピュータの相互作用を歴史記述の基軸とし、モジュール化による分業構造の転換を時代区分としている。一方、日本の電子産業の貿易収支は2013年に赤字に転落した。この近年の日本の状況については、「電子立国は、なぜ凋落したか」という記事をウェブに連載中である。

(西村 吉雄)



■ 新入会員の自己紹介

● 小泉 成史 (フリー、金沢工業大学客員教授)

元読売新聞記者、元テレビ朝日コメンテーターです。現在、科学ジャーナリストは名乗っていませんが、ライフワークで米国技術史を勉強中。技術系博物館に興味を持っています。著書は「おススメ博物館」(文春新書、絶版)

● 長谷川 聖治 (読売新聞東京本社)

ジャーナリストという言葉は、自分にはふさわしくなく、あまり好きではありませんが、ジャーナリスト会議の一員になれることをうれしく思います。今後ともよろしくお祈りします。

● 小島 あゆみ (ライター&編集者)

大学卒業後、日経ホーム出版社(現・日経BP)で女性誌の編集記者を経験した後、フリーのライター・編集者になりました。雑誌やウェブなどで、医療・健康分野や科学関連の記事を書いています。NPO法人・からだところの発見塾の理事として活動しています。

● 竹内 麻美 (アロマセラピスト)

早稲田大学理工学部化学科を卒業し、化粧品に携わってきました。今後、化粧品のみならずコンタクトレンズにも携わっていきます。どうぞよろしくお祈りします。

編集後記

▶この会報が会員の手元に届くころには、花の便りもあちこちから届いていると思います。歳を重ねてから、毎年この季節に満開の桜がはらはらと散っていく姿を見ると、「ねがわくは花の下にて春死なん その如月の望月のころ」という西行の歌が自然と思い出されます。元会長の小出さんも大好きだったというこの歌を、その永遠の旅立ちに手向けたいと思います。

▶会報の編集をしていてうれしいのは、月例会報告や会員だよりの執筆に積極的に協力してくれる会員がいることです。今号では科学ジャーナリスト塾生の都丸さんが2月例会報告の執筆に手を挙げてくれたし、会員だよりに岡本さんが快く協力してくれました。原稿書きが不慣れな会員も、文章修業の場だと思って気軽に挑戦してみてください。最大限のお手伝いをします。今後とも協力よろしくお祈りします。(靱)

編集・発行



日本科学技術ジャーナリスト会議

Japanese Association of Science
& Technology Journalists (JASTJ)〒112-0001 東京都文京区白山5-1-3 東京富山会館5F
電話・FAX: 03-5689-7191 Email: hello@jastj.jp
会長/小出重幸、事務局長/引野 肇
編集長/高木 靱生 (tyuki7581@yahoo.co.jp)